

子どもの虫歯一極化

地域や家庭環境要因

6(む)4(し)の語呂にちなみ、6月4日は「虫歯予防デー」。10日まで歯と口の健康週間だ。子どもの虫歯は減少傾向だが、地域や家庭環境によって口腔健康の格差が指摘されている。食べる・話すといった口の機能の治療も進む。

(伊藤蘭莉)

専門家、フッ化物洗口を推奨



2024年度の3歳児の虫歯有病者率＝県提供



歯科医師の石毛清雄さん
＝千葉市稲毛区

「乳歯の虫歯を放置する保護者もいる。虫歯を放置すると、永久歯も虫歯になるので注意してほしい。」(石毛さん)

石毛さんは約40年間、学校や保育園で歯科検診に携わってきた。虫歯のある子どもは減ったが、外国にルーツのある子や、養育が行き届かない子には虫歯が目立ち、あたる子とない子で二極化が進んでいると感じる。

千葉市稲毛区の歯科医師、石毛清雄さん(70)は、保育園での検診で驚いた。ある児童の乳歯が、すべて虫歯だった。外国にルーツがあり、歯磨きの習慣がない様子だった。保護者と面談したが、日本語が通じず、重要性を十分に伝えられなかった。

虫歯は社会経済的要因の影響が大きく、とくに保護者の学歴や所得と強い相関関係があるという。所得水準が低く生活に余裕がない家庭の子どもの割合は、全体の約15%を占める。経済的な理由から歯ブラシをまめに買い替えなかったり、フッ化物配合の歯磨き粉を買えなかったりする。

診もおろそかになりやすい。虫歯は、奥歯の溝や歯間にできやすく、約8割を奥歯が占める。前歯の虫歯は歯磨きで減少するが、奥歯は歯ブラシの毛が細かい溝に届きにくく、予防が難しい。

外国にルーツのある家庭も同様の課題を抱える。相田教授によると、日本人の年間の砂糖消費量は、海外の国々と比べて比較的少ない。一方、外国にルーツのある子どもは消費量が多い傾向にあるうえ、所得が低い家庭も少なくないことから、虫歯になりやすい環境にあるという。

相田教授は「フッ化物配合歯磨き粉での歯磨きも大事だが、フッ化物洗口は貧しい家庭の子どもほど虫歯を減らす効果が大きく、口腔健康の格差を縮められる」と語る。

口ばかみや口呼吸「受診を」

子どもの歯列矯正への関心が高まっている。この歯列矯正につながる症状が、口腔機能発達不全症だ。食べる、話す、呼吸を助けるといった口の動きが、年齢相応に発達していない状態を指す。

口呼吸、スマホやゲームでうつむく姿勢が続くと、舌が下がる「低位舌」になりやすい。低位舌だと歯並びが悪くなりやすく、口腔機能発達不全症につながるという。

船橋市の歯科医師、関本浩貴さん(69)によると、鼻呼吸は本来、舌が上あごに接している。この状態だと、舌が上あごを押し上げ、幼少期には上の歯のアーチが広がり、歯並びが整う。

関本さんの歯科医院では、舌のトレーニングを行っている。歯科衛生士の「口ばかみや口呼吸、下唇をかむ、よくかますに食べる、食事の時間がかかりすぎるなどの症状があれば、受診を」と呼びかけている。

院長と衛生士さんが朝日新聞の取材を受けました!

